

子どもが 本好きになるには…

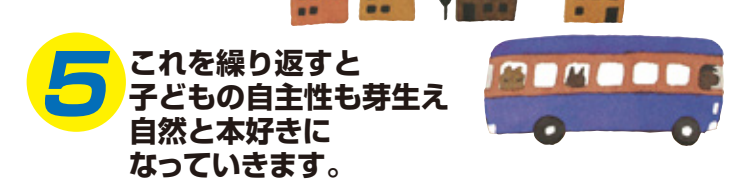
1 子どもといっしょに
本屋に行く。



3 親も子どもも
自由に本をえらぶ。



5 これを繰り返すと
子どもの自主性も芽生え
自然と本好きに
なっていきます。



子どもが本好きになるには…

このポスター「子どもが本好きになるには…」をつくるきっかけは、心理学者で当時、文化庁長官だった河合隼雄さんへのインタビューでした。

河合さんは「これをやればたいいの子は本好きになるのに」とおっしゃっていました。

その話の内容を順次並べたのが、このポスターです。河合さんは本を好きになるためには子どもが受け身ではダメ、読む本を子ども自ら選ぶ、その能動的、アクティブな行為が大切だと話されていました。

これまで、子どもの読書というと推薦図書とか課題図書とか、大人が絵本や本を子どもに「与える」ことにエネルギーを注いできた。ところが読書にとって最も大事なことが抜け落ちていた。それが、読む本は自分で選ぶ。そのことによってはじめて子どもの読書に対する主体的な気持ちが芽生えてくる。

本を読んで多くの知識を得るだけで、人は知的になるわけではない。知性は選ぶ、選択することで育つそうです。英語の辞書にも「知性・intellect」は「選り出す能力」となっています。すると、どこがその役割を果たしてきたか、答えは町の本屋、知性は町の本屋が担ってきた。



本は読む前に自分で手に取って選ぶ、その選択のおかげで人々は知らず知らずのうちに知的になってきた。

なにしろ本屋では選択の連続、「次、どんな本を読もうか」「この著者に、こんな本もあるのか」、そうやっているとき自ずから人は知的になっていく。

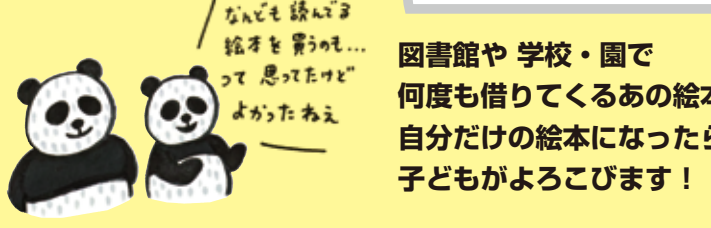
最近、三重県にある書店のイベントでこんなことがありました。

おばあさんと孫3人がイベントに参加。壁に貼ってあったこのポスターの4番目「子どもがどんな本をえらんでも、けっして文句を言わない」を見て「あら！私さっきこの子たちに言ってしまったわ」と。孫がすかさず「そうだよ！おばあちゃん駄目だよ、なんでも好きな本を買ってもいいよって言ったくせに」と。おばあさんも「なるほど！」と納得され、お孫さんが選んだ本をそのまま購入されていきました。

子どもたちもうれしそうでした。たしかに親や大人にとって「けっして文句を言わない」は、かなりむずかしい。しかし、ここが大人の我慢のしどころ、その我慢をすることで子どもの主体性は育っていく。それにしても、このおばあさんの「柔らかな心」には、感心しました。



本屋さんで 絵本選びに 悩んだら 子どもが えらぶ わたしの本棚



子どもがえらぶわたしの本棚

子どもに「どんな絵本を買ってあげればいいのかしら？」と迷っている親や大人は多い。評判の高い絵本を買ってあげたのに、子どもは喜びもしないし、興味も示さない。そうなる親や大人は、なんだか自分が間違ったような、損したような気分になる。読書に限らず何事も、子どもの「やるぞ！」という心の動き、そうしたやる気、意欲がでるかでないか、そこが一番の問題だ。

そこでみなさん、考え方を考えてみましょう。親や大人が子どもに「良い絵本を与える」という考えから、子どもが自分で「絵本は選ぶ」へ。「えっ、子どもに絵本を選ばせて大丈夫なの？」と思う方もいるかもしれませんが、心配することはありません、大丈夫です。今までが脅かし過ぎ、脅かされると人間つい「変な絵本を子どもに与えてはいけない、ちゃんとした絵本にしなければ！」と、緊張するものです。それに子どもの多くはすでに幼稚園や保育園、学校、図書館で気に入った絵本に出会っている、その可能性は高い。

親や大人は「園や学校、図書館にあるんだったら買うことはないでしょう」と思いがち。

しかし親や大人が、迷っているのであれば、子どもが気に入った絵本を買ってあげるのが一番、理由があります。理由の第一は、好きな絵本を買ってもらったのですから、子どもは間違いなく喜ぶ。喜ぶ子を見て親や大人もうれしい。何よりもまず親や大人が間違った、損したような気分になることはない。第二の理由は、子どもが好きになった絵本が並んでいる自宅の本棚、それはその子の「心のアルバム」といっていい。そう考えると買ってあげる価値は十分にある。



人間、中心におくべき大切な考え方は、まず「自分から見れば」ということ。そう考えると「自分のあり方」も見えてきて、次第に「自己の発見」にもつながっていく。他人の目ばかり気にしていると自分に対する自信を失うだけでなく、自分の中の反省する力も曖昧になってしまう。幼少のころからこういった考え方が身についていけば、子どもにとって最も大切なやる気や意欲にも大きな影響が出てくる。そうすると、子どもの自信、自己肯定感だけではなく読書への意欲も高まっていくでしょう。



おみやげに絵本を



よし、きょうはおみやげに絵本を買って帰るとするか!

いや、まあよ。どんな絵本がいいかな。そうだ、電話できいてみよう。

あ、それならいつも図書館で借りる絵本があるの。すごく気に入っているよ。

よろこぶかなあ〜

illustration ● 広瀬克也

おみやげに絵本を

絵本は「子どもに与える」から、「子どもが自分で選ぶ」と書いた。
しかしどうしたらいいかとなると心もとない。そこで具体的に考えてみる。
まず第一に考えるべきは「あなたの子どもの好きな絵本」があるかないか、あるとすればどんな絵本か、ということ。

幼稚園、保育園には連絡帳がある。
「うちの子が喜んだ絵本があったら、教えてください」と頼んでおく。
すると子どもの好きな絵本を知ることができる。
図書館で絵本を借りる。
子どもが2度3度「また借りて」と頼むようなら、その絵本を子どもは気に入ったと考えていい。
学校では、子どもに絵本を読んであげるボランティアの方がいる。
「今日はどんな絵本だったの、どうだった?」と話してみる。
すると子どもの好きな絵本を知ることになる。
大人はもちろん子どもが気に入った絵本を書店に行って買ってあげる。書店になければ注文しておく。
もらううれしさ、あげる楽しさこそが、まさにプレゼントのもつ力。
子どもはこんなやりとりをするうちに、自然と絵本に対する愛着や好みが育っていく。
つまり書籍一般への愛好へとつながり、子どもは読書へのスタート地点に立つことになる。

子どもの本の世界が広がる



あなたの子どもには好きな絵本や本がありますか?

ある! それはいいですね。そうしたら、その本の作者のほかの本を手にとってみる。

すると子どもの本の世界はどんどん広がっていきます。

illustration ● Takabatake Jun

子どもの本の世界がひろがる

「子どもがどんな絵本を好きなのか見当もつかない、どうすればいいのかしら」、そう思う親や大人は多い。
そんな方におすすめの方法がある。
まず親や大人が図書館か書店に行ってみる。
絵本の題名をみて「この絵本なんだろう」、あるいは「私の絵好きかも」と思ったら、まずその絵本を手にとってみる。
借りる、買うの基準は一つだけ。
あなたにとってただただその絵本が「面白い面白くないか」、つまり少しでも自分の心が動いたか否か。
ここがとても大事、その心の動きに自信を持つ。
子どものことは考えなくていい。
自分が食べて美味しかったものを人にすすめる。
食べ物と同じで、絵本も親や大人が読んで面白かった絵本をすすめる。
図書館で借りたり、書店で買った絵本を読んであげていると、自然に子どもも好きな絵本が出てくる。
そうになったら後は簡単。
子どもが好きになった絵本の作者、その作家の他の絵本を読んであげる。
『きんぎょがにげた』を気に入った子、その子と作者の五味太郎さんとの相性はいい、だから五味さんのほかの絵本を読んでみる。
すると子どもの絵本の世界は広がっていく。年齢のことを気にすることはない。
何かを好きになったり気になったり、あるいは面白いと思ったり楽しくなったり、ということはその人の「眠っている

何か」に触れたと考えていい。
エンターテインメント、つまり好き、面白い、楽しいは、人々が思っている以上の力をもっている。娯楽はたんなる気晴らしではない。その人の「眠っている何か」を掘りおこす大事な役割を担っている。
エンターテインメントは読書習慣のスタートでもあるし、自己を発見することにもつながる。
ちなみにエンターテインメントは「喜び」や「楽しみ」ですね。子どもも絵本を読んでもらって、嬉しくなったり、楽しくなったり、面白くなったり、その根底にある「笑い」こそがエンターテインメントの大元です。
ふとほほえんだり、にっこりしたり、目を細めたり、くすくすしたり、いろいろな「笑い」があります。
人それぞれ、子どもも人、「笑い」も子どももそれぞれ。当然「笑える絵本」もいろいろある。
そこで、年齢に関係ない「笑える絵本」のリストを作ってみました。
以下のQRコードよりご覧いただけますので、参考にしてください。



発行年月●2026年10月 発行
文●有川裕俊(絵本館代表)
発行●絵本館
〒167-0051 東京都杉並区荻窪 5-16-5
TEL.03-3391-1531
FAX.03-3391-1533
<https://ehonkan.co.jp/>

子どもが本好きになるには!!!

